

3 研究のまとめ

(1) 研究の成果

- 中・高等学校で研究を行った結果、発達の段階に応じた内容や方法について、学習指導要領解説等を確認しながら考え、実践することができました。中学校では、話し合い活動を段階的に組み込み、対話的な学びと主体的な学びを実現することができました。高等学校では、思考ツールを使って話し合いを行い、出された意見を整理しながら可視化することで、多面的・多角的な見方につなげることができました。
- 問題解決的な学習の重要な過程である課題発見について、より身近な教材を取り上げることで、生徒自身の問題として捉えさせることができました。また、題材を貫く問いの設定によって、課題意識をもたせ続けることができ、課題を解決しようとする意欲の高まりを確認することができました。
- 系統表を作成したことで、校種間・教科間のつながりを知ることができ、既習事項を確認しながら、授業を進めることができました。私たち教師が既習事項を把握することは、校種間・教科間での教材や題材の重複を少なくすると同時に、多面的・多角的な見方を系統的に育てていく上でも必要なことだと確認しました。
- これまでは、「食生活」「衣生活」「住生活」の学習時に「消費生活と環境」を組み込み、内容ベースで題材計画を立てることが多かったと感じます。今回の研究では、「消費生活と環境」の学習に「衣生活」の学習を合わせて行い、育成したい資質・能力ベースで題材計画を立てました。学習指導要領の改訂に向けて、指導方法（学習方法）の提案ができたと考えます。

(2) 今後の課題

- 今回は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」の「家庭科、技術・家庭科(家庭分野)の学習過程のイメージ」における「課題解決に向けた実践活動」までを研究したことになります。次の「実践活動の評価・改善」の段階を充実させることが家庭科教育のねらいに迫るために重要になってくると考えます。
- 今後、衣食住の内容でも系統表を作成し、小・中・高の学習指導要領解説だけでなく、教科書レベルでの学習内容の把握が必要だと考えます。
- 協働学習を行うと、慣れていないこともあり時間が掛かります。しかし、協働学習から得られる効果は非常に高いものがあるため、題材設定の工夫や年間指導計画の見直し等を行っていく必要があると思います。

(3) 終わりに

本研究をするにあたり、佐賀大学大学院学校教育学研究科教授岡陽子先生には、御多用の中、家庭科教育の重要性と今後の動向について御教授いただくとともに、研究の方向性を明らかにしていただき、たくさんの御助言を頂きました。深く感謝申し上げます。